淫魔なわたしを愛してください！

登場人物紹介

エドガルド

銀の毛並みをした狼族。
デュークの親代わり。
融通の利かない堅物。

アネル

イルミラの母親。
美しく妖艶な
伝説の大淫魔。

ヴィヴィアン

イルミラの妹。
奔放で好色な淫魔。
半人前のイルミラを
馬鹿にしている。

カルロス

常に貧血の吸血鬼。
女好きの変態ナルシスト。

デューク

人里離れた〈黒い森〉に住む
人外専門の魔術医師。
印象的な銀色の瞳を持つ
クールな美丈夫。
イルミラの事情を知り
主治医を買って出るが……

イルミラ

純情可憐な半人前の淫魔。
緩やかに波打つ黒髪に
赤い瞳をした美少女。
伝説の大淫魔を母に持ちながら、
男性恐怖症のため
未だ男性経験がない。

第一話　出逢いからして恥ずかしすぎます！

三つの王国の国境となっている〈黒い森〉。
深い深い森だけに、人間はなかなか近寄ることができない。
それもあって、ここには人ならざる種族たちがひしめき合っていた。
そんな黒い森の中央に、ぽかりと開けた場所がある。そこには丸太を組んで作り上げた一軒家が建っていた。
「あそこが、腕のいい魔術医師が住むという家ね……！」
魔力で自分の身体をふわりと浮かせて、ほっそりとした少女がじっと丸太小屋を見つめている。
彼女は「よし」と気合を入れると、長い黒髪とドレスの裾をはためかせ、そこを目指し一直線に飛んでいった。
柔らかく波打つ黒髪が風に舞い上がる。丸太小屋を見据える大きな瞳はルビーのように真っ赤に輝き、見る者の心を捕らえて放さない不思議な魅力を宿していた。
――彼女の名はイルミラ。外見は人間の若い娘と変わらないが、その身に宿す魔力は、人間の魔術師では遠く及ばないほど強大だ。つまり、人ならざる者である。

そんな彼女はとある深刻な悩みを抱えており、藁にもすがる思いでここへやってきたのだ。
（今までなにをやっても、どうにもならなかったけど……あそこに住む方なら、わたしを助けてくれるかもしれない）
その一心で、彼女は〈黒い森〉の中心目がけて一息に飛び抜けた。
丸太小屋の前に降り立った彼女は、乱れてしまったスカートの裾と外套の襟元をさっと整える。
そして決意が揺るがぬうちに扉を叩こうとすると――
「うぎゃあああ！　この藪医者、なにしやがるッ、……ぎゃ――ッ!!」
突如、扉の向こうから恐ろしい悲鳴が聞こえて、イルミラはビクッと身をすくませた。
「はい、暴れないでくださいねー。それ以上暴れたら包帯ずれますからねー。日の光にちょっとでも当たったら、あなた消えちゃいますからねー」
「うぎぃいいいッ！」
ほどなくして扉が中から開き、大柄な影がぬっと出てくる。見上げるほどの大きさと、全身を包む分厚い包帯に、イルミラは「ひぃっ！」と悲鳴を上げて飛び退いた。
「くそぅ、魔術医師め……。次にきたときには必ず八つ裂きにしてくれる……！」
「包帯を新しく変えたくらいで、いちいち八つ裂きにされてはたまりませんね。嫌ならほかの魔術医師を当たってください」
のしのし、というよりは、よろよろと出てきた大柄な影は、頭から足先までを包帯で包んだミイラ男だ。ブツブツ文句を言いながら森の奥に消えていく姿を呆然と見送ったイルミラは、「次の患者さんですか？」と声をかけられ、ハッと我に返った。
「は、はいっ。あの、ここに人外専門の魔術医師がいらっしゃると聞いて――」
扉を振り返ったイルミラは、言葉の途中で息を呑んだ。
ドア枠に寄りかかり、胡乱げにこちらを見つめる青年こそ、件の魔術医師だろう。
うしろでひとくくりにした真っ赤な髪に、金のチェーンつきの丸眼鏡をかけた若い男――聞いていた通りの外見である。
だがイルミラを強く惹きつけたのは、薄いレンズ越しにこちらを見つめる彼の銀色の瞳だった。
（なんて透き通った色の瞳……青みがかった銀色の目なんて、初めて見るわ）
長めの前髪に隠れていても、惹きつけられずにいられない美しさだ。
吸い込まれるほどの輝きに、イルミラはついつい見とれてしまう。
同じようにイルミラを注視していた青年は、やがてぽそっと「淫魔……？」と呟いた。
イルミラはそこでまたハッとして慌てて頭を下げる。
「は、はい、淫魔のイルミラといいます。初めまして……！」
挨拶をしながら、初対面の、それも男の人の顔をじろじろ見つめてしまったことに、かーっと首筋まで真っ赤になった。
極度の恥ずかしがり屋であり、異性を大の苦手としているイルミラは、たまらず逃げ出したくなってしまう。
『医師』とはいえ、目の前の彼も異性であることに違いない。そう思うと、緊張と不安に指先がか

すかに震え始めた。
「……念のためうかがいますが、こちらへきたのは治療のため？　それとも淫魔らしく、男の精気を吸うためですか？」
「ち、治療のためですっ。精気なんて、そんな、とんでもないです！」
イルミラはさらに赤くなりながら全力で否定した。異性が苦手な自分が精気を吸うなどとんでもない！
とはいえ『淫魔』というのは彼の言う通り、男と見れば即座に襲いかかって精気……というか、その精液を搾り取る生き物だから、警戒されるのも無理はない。
イルミラは緊張で喉がカラカラに渇くのを感じつつ、誤解を解く意味も込めて、ここへきた理由を明かそうとした。
「治療とはまた違うかもしれませんが、少しご相談したいことがあって――」
恥じらう気持ちが大きすぎて、なんと説明したらいいのか戸惑う。そんなイルミラに、魔術医師の青年はすっと身体を引いた。
「とにかく中へどうぞ。診察してみましょう」
「え？」
診察？　と首を傾げるイルミラだが、スタスタと歩いて行ってしまった青年を見て、慌ててあとをついていく。
木のぬくもりに包まれた家は、外観よりずっと広々としていた。天井も高く、廊下の幅も広い。

大柄な患者がやってきても不自由のないように造られているのだろう。
青年は玄関扉から一番近い診察室に彼女を案内した。
「どうぞ、座ってください」
ゆったりした造りの椅子を示され、イルミラはおずおずと腰かける。もっと深く腰かけろと言われ、その通りにすると、いきなり、ガシャン、ガチャンッ！　と大きな金属音が響いた。
「なっ！　ななな、なんですかこれは!?」
見ればどこからか伸びてきた鎖が、椅子の肘掛けと脚に、イルミナの両手足をがっちり固定している。慌てて抜け出そうとするが、突然背もたれがうしろにガタンと倒れた。
「きゃあっ!?」
「はい、力抜いてくださいねー。足開きまーす」
「えっ!?　やっ、ちょっ……いやあああああ――ッ!!」
言われたそばから椅子の脚が開いていき、一緒にイルミラの足も大きく開かされる。
気づけば両足を限界まで広げ、秘所を青年の目の前にさらけ出す格好になっていた。
「ひっ、うっ……」
あまりのことにイルミラは卒倒しそうになる。が、青年は構わず彼女のそこをのぞき込んだ。
「……あれ？　きちんとしたドロワーズを穿いているんですね？　淫魔なら普通、下着なしかスケスケのきわどいのか、紐のようなのを身につけているものですが」
まくれ上がったスカートの下から、ちょっとだけ顔をのぞかせるドロワーズのレースを青年に

ばっちり見られる。イルミラはひくっと喉を引き攣らせた。
「い……、い……っ」
「では診察します。淫魔の不調の原因と言えば、だいたいは性病ですからね。ひとまず下から診ていきますので、下着を取りま――」
「いやぁあああ――ッ!!　放して変態!!　痴漢ッ!!　乙女の敵ぃいいいい――ッ!!」
「ぐほっ！」
ありったけの魔力を振り絞り、両手足の拘束を引きちぎったイルミラは、勢いのまま医師の頬を張り倒した。
魔力を込めた平手打ちにはそれなりの威力がある。医師の青年は診察机ごと吹っ飛ばされ、ゴシャァアン！　と盛大な音を立てて壁に激突した。
そのあいだも、イルミラは再び拘束してこようとする診察椅子をさらなる張り手で打ち倒す。ほとばしる魔力で豊かな黒髪を逆立てながら、彼女は涙目になって叫んだ。
「わたしは性病になんてかかっていませんッ!!　話も聞かないうちから勝手に決めつけないでください――ッ！」
するともうもうと立ちこめるほこりの中から、青年がおもむろに身を起こす。真っ二つに割れた診察机をよけて立ち上がった青年医師は、ぱちくりと瞬きをした。
「……性病じゃない？　……ああ、なんだ。それならよかった。安心しました」
汚れた白衣をパンパンと叩き、曲がった眼鏡を直して、青年は改めてイルミラに向き直った。

「若い女性に失礼しました。自分でも不思議なのですが、あなたがほかの男の手垢にまみれ、病気までもらってきたと思ったら、なぜだか頭に血が上りまして。少々強引なやり方をしてしまいました」
「え……？」
どういうこと？　と首を傾げるイルミラに、彼は恭しく頭を下げた。
「そういえば自己紹介もまだでしたね。僕は人外専門の魔術医師デュークです。ええと、イルミラさん？」
「は、はいっ」
心なしか、イルミラを呼ぶときの彼の瞳が甘く和んだ気がして、イルミラはなぜだかドキッとしてしまった。
「それでは改めて、ここへきた経緯をうかがっても？　見たところあなたは健康そうだ。ただ、淫魔にしては種族特有の香りが弱い気がしますが」
「あ……」
イルミラはこくりと唾を呑み込み、大きく頷いた。
「はい……そのことで、ご相談に上がったのです」
「……なにやら訳ありらしい。別室へ移りましょう。今日はほかに患者もいないし、お茶でも飲みながら話しましょうか」
魔術医師の青年デュークの言葉に頷き、イルミラは半壊した診察室を出た。

別室に入ったデュークは、指の一振りで明かりと暖炉の火をつけ、さらなる一振りでお茶を出現させる。それだけで、イルミラは彼がそうとう強い魔力の持ち主であることを理解した。

見た目は人間そのもので、彼自身、『人間』を名乗っているという。だが純粋な人間にしては強い魔力を感じた。もしかしたら、人外の種族の血を引いているのかもしれない。

いずれにせよ、これだけ強力な魔力を持ち、壁に激突しても怪我一つ負わない頑丈さがあれば、人外のみを扱う『魔術医師』にもなれようというものだ。

「殺風景な部屋で申し訳ない。普段、居間はあまり使わないもので」

とりとめもなく考えていると、こちらを振り返ったデュークが唐突に謝ってきた。

イルミラは慌てて首を横に振る。

「いえっ、そんな。突然押しかけたのはこちらですから、お気になさらずに」

それどころか、丁寧にもてなされて驚いているくらいだ。目の前に置かれたカップは白磁に金の持ち手がついた洒落たデザインだし、ティースプーンも可愛らしい。年相応に可愛いものが好きなイルミラは、このカップだけでも充分心が躍った。

さっそく口をつけようとしたが、まだ外套を羽織ったままであることに気づき、慌ててそれを脱ぐ。灰色の目立たない外套の下から現れたのは、露出の少ないデイ・ドレスだ。深緑を基調とした落ち着いた色合いで、袖口や詰め襟を飾るレースは黒である。

それを見て、デュークが眉間に皺を刻んだ。

「……下着を見たときも思ったのですが、あなたは本当に淫魔らしくない方ですね」

向かいにちょこんと座ったイルミラを眺めて、デュークは淡々と見解を述べた。

「淫魔と言えば、男を襲うために存在すると言っても過言ではない色情魔です。下着は邪魔だからハナから身につけないことがほとんどだし、衣服も男を誘うためのきわどいものが普通だ。それに枯れかけの薔薇のような、淫魔特有の香りをところ構わずまき散らしているのに、あなたからはその香りを感じない」

くん、と鼻を動かしたデュークは、わずかに目元を和ませながらかすれた声で呟いた。

「かろうじて感じられる香りは……清純な、柔らかな香り。薔薇というより、百合。実に貞淑な香りだ――」

「そ、そんな風に言われると、居心地が、悪いのですが……」

デュークがうっとりとした表情で見つめてくるものだから、イルミラはたちまち頬を赤く火照らせた。

「わたしが淫魔らしくないのは今に始まったことではないんです……。淫魔特有の男性を誘う香りが弱いのも、……わたしがまだ、一人前の淫魔でないことが関係しているんです」

高いところから飛び降りる気持ちで打ち明けたイルミラに、さしものデュークも驚いた様子で目を瞬いた。

「……え？　一人前の淫魔ではない、ということは……あなたはまだ、処女？」

単刀直入に尋ねられ、イルミラはボンッと音が出そうなほど真っ赤になった。

「……はい。そうです……」
「――信じられない。淫魔といえば、初潮がきたら速攻で男漁りに向かって、とっとと処女を捨てて一人前になるものだと思っていましたが」
「ええ、まぁ、おっしゃる通りで……」
イルミラは背を丸めて火照った顔を隠した。
デュークの言う通り、たいていの淫魔は初潮が訪れる頃には、すでに男を落とすための手練手管を身につけている。
ちなみに淫魔という種族に男は存在しない。生まれるのは女の子ばかりだ。
大人になるための身体の準備が整ったら、彼女たちはすぐさま相手を見つけに行く。一刻も早く処女を捨て一人前になるのだと、本能が大騒ぎするからだ。
淫魔にとってはそれが普通だし、イルミラの姉妹たちもそうやって一人前になっていった。
たかだか十代の子供でも、処女を捨てたあとの淫魔は恐ろしいほど艶めかしくなるので、大輪の薔薇のような香りを振りまきながら、どんどん男を魅了していく。
――それなのに、イルミラは年頃になっても未だ処女を捨てられず、一人前の淫魔として独り立ちすることができないでいた。
「ちなみに、今おいくつですか？」
デュークの質問に、イルミラは一度こくりと唾を呑んで、消えそうな声で答えた。
「……つい先日、十八歳になりました」

「……確か、淫魔はどんなに遅くても十八歳のうちに処女を捨てなければ、消滅するんでしたよね？」
イルミラは重々しく頷く。
消滅とは文字通り、存在そのものが消えてしまう現象だ。身体が消えるのはもちろん、身につけていたものも一緒に消え、人々の記憶からも消え、最初からこの世に存在していなかったかのごとく、なにもなくなってしまうのだ。
それは死ぬことよりも恐ろしい。死ねば最低でも骸が残る。なのに消滅してしまっては、それすら残らないのだから。
「けど、わたしはなぜだか、昔からそういう、淫魔としての性質が希薄みたいで」
希薄どころか、男性を見ると怖くて逃げ出してしまう。発情する機会などついぞなかった。
「見かねた姉たちが、男友達と乱交している現場に引っ張っていったり、発情期の犬族の群れに放り込んだりと、いろいろ手を尽くしてくれたのですが……」
いずれも惨憺たる結果に終わったのだと、イルミラはため息をついた。
「おまけにわたし、淫魔としての能力は低いくせに、潜在的な魔力は強いらしくて。感情が高ぶるといろいろなものを吹き飛ばしたり、爆発させたりしてしまうのです」
「先ほどの平手打ちも、なかなかの威力がありましたよ」
「……お恥ずかしい限りです。あの、今更ですけどお怪我とかは……？」
「僕のことなら心配なく。職業柄、暴れ回る患者に殴られたり蹴られたりというのは日常茶飯事で

すので。それにもともと頑丈ですから、か弱い女性の平手一つで伸されたりはしません」

そうは言うけれど、実際は彼自身が相当の魔力の持ち主だからだろう。

現に、これまで会ってきた男たちの末路は悲惨なものだった。イルミラに襲いかかろうとした彼らはもれなく反撃を受け、ひどい者は一ヶ月も寝込む重傷を負ってしまったのだ。

もちろん中には紳士的な者もいたが、手を取られた途端に鳥肌が立ってしまい、気づいたらぶっ飛ばしていた。

「おかげで姉たちからも見限られてしまって……。妹たちには馬鹿にされるし。母だけは唯一、なんとかなればいいのにと言ってくれますが」

「姉妹が多いということは、お母上は相当長生きしている淫魔なのですね？」

「母はアネル・ラッドランプといいます。ご存じでしょうか？」

「……知らぬ者はいない、淫魔の中の淫魔ですね」

デュークが口をへの字に曲げて答える。

彼の言う通り、母アネルは現在生きている淫魔の中でもっとも高齢で、もっとも強い力を持つ最強の淫魔だ。

だが皺くちゃのお婆ちゃんではない。外見は大人の女の色香を持つ艶やかな美女だ。淫魔としての魅力があまりに強すぎるため、最近は人里に降りていけないほどである。

うっかり降りたりすれば、そこにいる男たちが年齢種族を問わずに一気に押し寄せ、大混乱となってしまうからだ。

「そんな大淫魔の娘ともなれば、淫奔もいいところだと思うのですが」

「はい……。姉妹たちは、母を見習って淫蕩の限りを尽くしています。けれどわたしはどうしても、男の人が怖くて……」

しょんぼりうつむくイルミラに、デュークはふむ、と顎をさする。そしてなぜか、椅子をイルミラの向かいから隣へと持ってきて座り直した。

「問診の一環と思って答えていただきたいのですが、ご自分ではそういう体質になった原因のようなものに、なにか思い当たることはありませんか？」

「……強いて言うなら……わたしの父が人間というのに関係しているかと」

「人間？」

「はい。それも神殿に仕える高位神官だったそうです。母の話では相当の堅物だったらしくて、堕とすのが楽しかった、と……」

デュークは一瞬遠い目になってから、「失礼」と一言断ってイルミラの手を取った。

男の人にいきなり手を握られ、イルミラの心臓がどきんと跳ね上がる。とっさに振り払いそうになるが、デュークがなにやら呪文を唱え始めたのに気づき、かろうじて思い留まった。やがて呪文に合わせ彼の指先から柔らかな光が溢れ出す。

とても温かくほっとする光だ。けれど、それを紡ぎ出したデュークは即座に渋面になる。

「……あー。今、あなたの『血』を探ってみたのですが、これはもう体質を通り越して『呪い』みたいになっていますね」

「の、呪い？」
穏やかでない言葉にぎょっとしてしまう。顔を上げたデュークは眼鏡の蔓を軽く押し上げた。
「たぶん、あなたのお父上は相当な潔癖症で、高潔な人間だったのでしょう。で、淫魔に精を搾取されたことがかなりの屈辱だった。宗教にもよりますが、あなたのお父上が勤めていた神殿は、結婚どころか異性交遊も禁じていたのかもしれませんね。お母上に搾り取られる瞬間、ありったけの拒絶と呪詛を精に込めて放ったみたいです。二度と男にさわれないように、という念を込めて」
「そ、そんなことが……!?」
「現に、ちょっと血のルーツを探っただけで、僕にまでその強い拒絶が伝わってきて気持ち悪くなりました」
手をひらひら振るデュークは、間違って不味いものを口にしたような顔をしていた。
「ただあなたの母上は強すぎてまったく呪いが効かず、代わりに娘であるあなたに移行しちゃったみたいです。だからあなたが過剰に異性を恐れるのは、あなた自身の性格というより、受精の際に発動した父上の『呪い』の影響が大きいのでしょう」
「そ、んな……」
思ってもみなかった事実にイルミラは愕然とする。
母曰く、高潔な父は淫魔に襲われたことが屈辱すぎて、自ら神官をやめ禊の旅に出たらしい。だがその途中で運悪く命を落としたそうだ。
そんな父がかけた『呪い』がどれほど強いのかは、まさに推して知るべしだろう。

「ですが、あなたには紛れもなく、最強の淫魔であるお母上の血も流れている」
絶望に沈むイルミラに、デュークはきっぱりとそう言った。そしてイルミラの身体をひょいと持ち上げ、なぜだか自身の膝の上に座らせる。
自分のお尻が彼の腿の上に乗っている状態に、イルミラは絶望を忘れ、ぼんっと音が出そうなほど真っ赤になった。慌てて下りようとするも、デュークの片腕がしっかり腰に回っていて身動きが取れない。
「あ、あああ、あのっ！　お医者様……！」
「デュークと呼んでください」
「デューク様！　て、手を、手を離してくださ……っ！」
しかし、デュークは混乱する彼女の肩をぐいっと引き寄せしっかり抱きしめてくる。イルミラはたまらずに、ひぃっ、と頬を引き攣らせた。
「そんな倒れそうな顔をしないで。これも治療の一環です。僕はあくまで医師としてあなたにふれていますので」
「ち、ち、ち、治療っ？　本当にっ？」
「だってあなたの望みは、消滅の危機を逃れるため、処女を捨てて一人前の淫魔になることでしょう？　それならまずは男に慣れないとどうしようもありません」
「で、でででもっ！　わたしっ、男の方に慣れなくても、その、処女さえ失えればそれでいいので……！」

「んん？　こうして男にふれられるだけで卒倒しそうになるあなたが、どうやって処女を捨てようと？」

「そ、それを相談しにきて……ひぃっ、そこ、さわらないでくださいいいいい……！」

いつの間にか、ドレス越しにゆっくりと太腿を撫でられ、イルミラはぞわぞわする感覚に背筋を震わせた。

「具体的に、なにか方法を考えていたりは？」

「ひぃっ、は、はい、あなたがっ、う、腕のよい医師と、聞いたのでっ！　……び、び、媚薬でも、作っていただいて、それを適当な男性に使おうかと……！」

耳元に息を吹きかけながら尋ねられ、イルミラは息も絶え絶えになんとか答える。

しかしデュークはふ～っとため息をついて、おもむろに彼女の首筋に鼻先を埋めた。

「きゃあ……！」

「その方法はおすすめしません。媚薬を使ったその男が、それこそ性病でも持っていたらどうするんですか。あまりに危険で無謀な考えです」

「そ、そう、言われて、も……！」

「それにあなた自身、そういう男に無理やりされることで、根深いトラウマを抱える可能性もあります。せっかく一人前の淫魔になっても、男が怖い上にセックスも怖くなったら本末転倒でしょう。なにせ一人前の淫魔は定期的に男の精を受けなければ、衰弱して死んでしまうんですから」

「で、すが……っ、やンっ」

いきなり耳の裏をペロッと舐められ、イルミラはびくんと身体を跳ね上げた。

なぜデュークはこんなことをするのだろう？　これも治療の一環なのだろうか？

激しく狼狽しつつ、イルミラはなんとか抗おうとした。

「じ、実際に、処女を捨てられれば、父の呪いも解けて淫魔らしくなれるかも……！　んっ、お、男の人のことも、平気になる、かも、しれないですし……、ンぅう……っ」

デュークは尖らせた舌先をイルミラの小さな耳孔に差し込み、チロチロと動かしてくる。

むずがゆい刺激に背筋がぞわぞわした。恥ずかしさのあまり、今にも心臓が飛び出しそうになっている。

「や、ぁ……っ、ど、して……、さわるのぉ……？」

「治療です」

デュークはきっぱりと言い切った。

「希望を抱くのは勝手ですが、医師として言わせてもらえば、あなたの見解は甘いと言わざるを得ない。その辺の男に処女を捧げるのは絶対にやめなさい」

「で、でも……、んあン……っ、それなら、どうすれば……あ、あぁっ、やっ……！」

「幸い、消滅までまだ時間があります。そのあいだに異性やセックスに慣れればいいんです」

「え、えええぇ……？」

詰め襟のボタンを外され、ほっそりとした首筋を露わにされたイルミラは、羞恥と不安にぷるぷる震える。

「そ、んな……、どうすれば、……あんっ」
「簡単なことです。あなたが男慣れ、セックス慣れするように、僕が治療を施しましょう」
「えええっ……？」
「幸か不幸か、あなたは僕にはそれほど嫌悪感を抱かないらしい。……こうされても、さっきみたいに吹き飛ばさないでしょう？」
イルミラは言われて初めてそのことに気づく。先ほど診察室で下着を見られたときは、考える前に魔力を爆発させていた。それなのに、なぜか今は同じくらい羞恥を覚えていても混乱に陥ることがない。
デュークの大きな手に剥き出しになった首筋を撫でられ、頬に唇を押しつけられても、彼を拒絶する気にならなかった。
――死ぬほど恥ずかしいことには違いないけれど。
「そ、それ、は、たぶん、あなたがお医者様で……っ、ち、治療とおっしゃっているから……！」
「でしょうね。まぁ、今はそれでよしとしましょう。――とにかく、ほかの男に媚薬云々は却下。なぜならあなたが誰かとそうなることを想像しただけで、僕がその相手の男を殺したくなるから」
「は、はい？」
不意に不穏さを孕んだ低い声で呟かれて、イルミラはびくっとした。
しかしデュークはそれまでと変わらぬ涼しげな顔で、イルミラのスカートをまくり上げて、真っ白な太腿にじかに手を這わせてくる。

「あっ、あああ、あのっ！　ちょっと……！」
「拒まないでくださいね。これも治療の一環です。あなたが僕をあまり恐れないのは不幸中の幸いでした。……まぁ、もしかしたらあなたも僕と同じく、出会った瞬間ピンとくるものを感じているのかもしれませんが」
「はぃ？　なにを、おっしゃって……いるのか……っ、んン……っ？」
デュークの顔が近づいてきたと思ったら、唇を温かななにかでむにゅっと覆われて、イルミラは硬直した。
真っ赤な目を限界まで見開き、眼前に迫るデュークの瞳を見返す。あまりに近すぎて、彼の眼鏡がイルミラの鼻にコツンと当たった。
（え、ちょ、ちょっと待って、これって……っ？）
「キス……!?　んむっ……、ふ……っ」
「鼻で息をして。あと、もう少し舌を伸ばして」
「ンぅう……？」
唇を合わせながら淡々とそう指示され、イルミラは大混乱に陥った。
とっさに口を開くと、熱くぬるついたなにかが口腔に入り込み、縮こまるイルミラの舌をぬるりと絡め取る。
「ッ!?　……ふ……ッ!?」
なにがどうなっているのだろう。

なぜ自分の口の中を、自分の舌ではないなにかが這い回っているのか。
おまけにいつの間にかしっかり正面から抱き寄せられて、乳房がデュークの胸板に押し潰されている。しかも予想外にたくましい彼の腕に腰をがっちり拘束されて、逃げようにも身動きできない体勢になっていた。
「ふぁ……デュー、ク……さまぁ……っ」
「……その声、反則。もうやめてあげませんからね」
「ええっ？　あ、んむっ……、ふ、ぁあ……ッ！」
肉厚の舌がイルミラの歯列をねっとりと舐め回す。快感が頭を突き抜けていくのを感じて、彼女は激しく狼狽した。

――いったいどうしてこうなったのだろう？
「ひあっ、あ……、ンン……っ」
湧き上がる愉悦のあまり細腰をくねらせ、イルミラは何度も背をしならせながら、真っ赤に上気した顔ではぁはぁと喘いでいた。
いつの間にか地味な色合いのドレスは床に落ち、コルセットとドロワーズのみの下着姿になっている。
場所も暖炉前に置かれた長椅子へと移動しており、そこに深々と腰かけたデュークの膝の上で、イルミラは丹念な愛撫を施されていた。

「ひ、ぅ……、だ、だめぇ……！」
もう何度、駄目、やめて、と声を張り上げただろう。
しかし背後から抱きしめてくるデュークはそれに構うことなく、イルミラの耳裏に舌を這わせ、耳朶を甘噛みし、細い首筋に唇を滑らせていく。
熱い吐息が肌にかかるたびに、ぞくぞくした喜悦が身体の奥底から湧き上がってきた。初めての感覚に、イルミラは羞恥と戸惑い、不安と混乱に突き落とされて、ふっくらとした唇をわななかせる。
ルビーのような鮮やかな瞳に溜まった涙が、今にもこぼれ落ちそうだ。
身体が震えるのに合わせて、長い睫毛がふるふる揺れるのも、なんとも扇情的で艶めかしい。
――もっとも快感に耐えるイルミラには、自身のそんな変化に気づく余裕はなかったが。
「も……やめ……、はっ、あぁあ、んッ……！」
「耐えてください。快感に慣れることこそ、この治療の一番の目的です。セックスを恐ろしいものではなく気持ちいいものと、男を恐怖の対象ではなく快感を与えてくれる者と見られるようになることこそ、今のあなたに必要なことです」
どんどん乱れていくイルミラに反し、デュークが変わらず淡々とした口調のままでいることも、羞恥心をよけいに掻き立てた。
（た、耐えろと、言われても～～！）
耳孔に舌を差し込まれちろちろ動かされるだけで、身体がむずむずしてたまらない。彼の手が思

わせぶりに二の腕やデコルテを撫でてくるのにも、いちいち反応してしまうくらいだ。
なにより、彼の膝の上に座っているこの体勢が、とんでもなく恥ずかしいというのに……！
だが何度逃げだそうとしても、まるで見えない糸でくくりつけられているかのように引き戻されて、イルミラは結局ねっとりとした愛撫を受け続けていた。
「はっ、はぁっ、……い、いつまでこうするの……？　あん……っ」
「まだまだこれからですよ。肝心なところには一つもふれていませんし」
「そ、そんな」
つい絶望的な表情を浮かべたイルミラに、デュークの目が妖しく細まる。
「んー、なら、そろそろ次の段階に行ってみますか？」
「つ、次って……あっ！」
デュークの手がコルセットの紐を引っ張るのを感じて、イルミラは身体を強張らせた。
「い、いけません。お願いやめて……っ」
「そんな風に懇願されると、なにがなんでも脱がせたくなるのですが」
「やぁっ、どうして……、あっ」
必死の抵抗も虚しく紐の端がしゅっと解かれ、身体の締めつけが一気に緩む。
真っ白な乳房が弾むように顔を出して、イルミラはひゅっと息を呑んだ。
「ほう、これは大きい――」
「言わないで……、う……っ」

淫魔とは思えない性格に育ったイルミラだが、その身体つきは年相応……よりも、かなり早く育っていた。
背はさほど高くないが、手足はすらりと長く細い。首も腰もほっそりしているのに、胸と臀部には張りがあり、異性だけでなく、同性でさえうらやむほどの極上のプロポーションを持っていたのだ。
だがイルミラ自身は、自分の大きな胸やお尻がまったく好きではなかった。それどころか、淫魔の性を前面に押し出す身体つきが恥ずかしくてたまらず、コルセットをわざときつく締めて、胸の膨らみを押さえつけていたほどである。
締めつけが緩んだことで、二回りも大きく見えるようになった乳房を目の当たりにし、イルミラは恥ずかしさのあまり両手で顔を覆った。
だがデュークはわずかに目を瞠ったのち、それまで背中から抱きしめていたイルミラの身体を反転させ、自分と正面から抱き合う体勢にする。
「きゃあっ!?　デュ、デュークさま……ッ？」
「綺麗な胸ですね。真っ白で……こんなに大きいのに、乳輪は小さく、乳首も可愛らしい」
「ひっ……!?」
デュークの言う通り、シミ一つない真っ白な乳房は、綺麗なお椀形に盛り上がっている。呼吸に合わせ、かすかに震えるのがなんとも扇情的だ。
頂を飾る乳輪は、乳房の大きさに反して小さく、薄赤くて慎ましい。かすかにしこり始めた乳首

など、男ならむしゃぶりつかずにはいられないほど可愛らしかった。
だが言われたほうのイルミラは、喜びよりも羞恥といたたまれなさを強く感じて、顔をくしゃりと歪めてしまう。
「み、見ないで、見ないでください……！」
「無理です。こんな美味しそうなものを前にして目を逸らすことなどできません」
「お、美味しそ……？　ひあっ!?」
デュークがおもむろに乳房に顔を寄せてきて、イルミラは必死に彼を押しやろうとした。
「だ、だめです！　食べちゃ……っ」
彼があまりに真剣に膨らみを見つめているので、もしや本当に食べられるかも……!?　と恐怖が芽生える。
そんなイルミラに、デュークはかすかに笑った。真っ白に盛り上がった乳房の谷間から、不敵な上目遣いでこちらを見つめてくる。
「本当に食べたりしませんよ。ただちょっと、味見するだけです」
「……ッ!?」
そう告げる彼の声はこれまでで一番艶っぽく、眼鏡の奥の瞳は捕食者のようにギラついている。
これまで男性にこんな目を向けられたら、一目散に逃げるか魔力を暴発させていたイルミラだ。
なのに、今はなぜか心臓が大きく音を立てて、体温が一気に上がるのを感じて驚いてしまう。
おまけになんだか……身体の奥が……妙にむずむずして、切ない感じが……

（ど、どうなっているの、わたしの身体……！　デューク様に見つめられるだけで、なんだかドキドキして、……苦しい……っ）
だが決して不快な感じではない。少なくとも今すぐ張り倒して脱走したいとは思わなかった。
とても見苦しい姿をさらしているであろうことは、いたたまれなくて仕方ないけれど……
「ここ、可愛いですね。見ているだけでぷっくりしてきて。ほら、もう弾けるくらいになってますよ」
「え……？　あ、あんっ！」
デュークが人差し指の腹で、左の乳首をピンと弾く。硬くなりかけていた乳首は、刺激を受けてたちまちぷくんと勃ち上がった。
「匂いも強くなった」
「ひんっ……」
うっすらと上気した胸元をペロリと舐められ、イルミラはびくんと肩を揺らす。
「は、あぁ……っ」
「繰り返し言いますが、これは治療の一環です。恥ずかしがることも心苦しく思うこともありません。あなたは与えられる感覚を素直に受け取り、感じればいい。わかりましたか？」
そんなことを言われても、もう今の時点でいっぱいいっぱいだ。頷けるはずがない。
イルミラは泣きそうな顔で首を振るが、デュークは当然ながら聞き入れてはくれなかった。
「本当に、可愛い果実だ。口に含まずにはいられない……」

「あっ！　ンン……っ」

膨らみ始めた二つの乳首を、デュークは指先でコリコリと刺激してくる。

人差し指と親指の腹に優しく挟まれしごくようにされると、胸の奥に痛みのような疼きのようなにかが走って、それが下腹をさらに熱くした。

「はっ、あぁ、あ、ン……ッ」

未知の感覚に目を見開いてわななくイルミラだが、すっかり勃ち上がった乳首をペロッと舐められた瞬間、大げさなほど肩を跳ね上げてしまった。

「ひぁっ、……あっ、きゃっ……！」

とっさに逃れようとしたイルミラは、危うくデュークの膝の上から転げ落ちそうになる。

デュークはそれを軽々と受け止め、彼女を長椅子の座面に仰向けに押し倒した。

そして乳房に顔を埋め、柔らかな膨らみを包むように揉みしだく。

「いぁっ……、あ、あ、あっ……」

ふるんと揺れた乳房が、彼の手の中で卑猥に形を変えていく。

恥ずかしくてたまらないのに、ゴツゴツした手の平で乳首を転がされ、もう一方の乳首を温かな口腔に咥えられると、背筋にゾッとするほどの喜悦が押し寄せ、知らず背が弓なりにしなった。

「ひぁ……、ンンぅ……！」

ちゅっ、ちゅうっ、と音を立てて乳首を吸われて、イルミラはたまらず甘やかな声を漏らす。身体の奥がぐつぐつ煮え立つような快感が溢れて、自然と胸を突き出す体勢になっていた。抗おうと

しても手足に力が入らず、デュークのシャツを握る指先が弱々しく震えてしまう。
繰り返し乳首を舐められ、乳輪ごと吸い上げられると、頭の中がぼんやりと霞がかっていく気がした。
「はぁ、はぁっ……、んっ……！」
「いいようですね」
長い睫毛を震わせながら、濡れた唇をわななかせるイルミラにデュークは微笑む。
視界の端にチラリと彼の微笑みを見つけたイルミラは、それだけで胸がどくんと高鳴るのを感じた。すると不思議なことに、身体を渦巻く愉悦も一気に倍になって暴れ始める。
「……っ、デュークさ、ま……っ、あぁ、だめ……、わたし、なにか……おかしく……っ」
「正しい反応ですよ。それにやはり淫魔だけあり、感度がいい。これなら治療もはかどりそうです――」
「ああぁん……！　んく、ンっ……、あぁぁ……ッ」
ちゅぱっ、と音を立てて、きつく吸い上げた乳首を解放される。それに合わせ豊かな乳房がぶるんと震えて、イルミラはいやいやと首を振った。
「も、だめ……、本当、に……っ」
「まだまだ。治療は始まったばかりです。さあ、いい子だから少し腰を上げなさい」
「え……腰を……？」
「まだ一枚、あなたの身体に残っている布がありますよ？」

ドロワーズを引っ張りながら言われて、イルミラは気が遠くなる思いだった。
「い、いやぁっ、それは……取らないでぇ……！」
大きな胸を見られただけでも息が止まりそうなのに、この上そんなところまで見られてしまったら……！
「それなら、こちらから攻めましょうか？」
「ひあっ！　あ、あっ、そこは、あぁ……ッ」
デュークがドロワーズから手を離し、代わりにイルミラの脇腹をいやらしい手つきで撫で上げてくる。びくびく震えたイルミラは、次の瞬間、デュークが舌先を臍のくぼみに差し入れたのを見て悲鳴を上げた。
「ひぁああッ……！」
形のよい小さな臍を舌先でくりくりとえぐるように刺激されると、愉悦がじかに下腹に響いてたまらなくなる。
赤い瞳をこぼれんばかりに見開いたイルミラは、臍をひと舐めされるごとに、びくっ、びくんっ、と腰を跳ね上げた。
「そん、な……、ああ……！」
くちゅくちゅとわざと音を立てて、唾液を纏わせた舌先でねっとりと臍を舐め回す。そうしながらもデュークは、豊かな胸を波打たせて喘ぐイルミラを眼鏡のレンズ越しにじっと観察してきた。
その視線は、果たして医師として患者の様子を観察しているのか。それとも……

いずれにせよ、上半身への愛撫ですでに限界近くまで昂ったイルミラには正常な判断は下せない。ただただこの喜悦から逃れたくて、あるいはどうにか昇華したくて、豊かな黒髪を振り乱しつつ懸命に正気を保とうとしていた。

だがイルミラのそんな努力を、デュークは易々と打ち砕く。

指先できゅっと乳首を摘まれ、くりくり刺激されながら臍を舐められたイルミラは、立ち上る疼きにみだりがましい声を上げてしまった。

「ひぃっ、だ、めぇえ……ッ！」

イルミラがびくびくと身体を震わせたところで、デュークは臍から舌を引き、代わりになだらかな腹部や乳房の膨らみにきつく吸いついていく。

真っ白な肌に鮮やかな赤い痕がつき、そのたびにイルミラは唇を震わせた。舌の付け根から絶えず唾液が湧き出し、それを呑み下すだけでも一苦労だ。

「く……ぅうン……っ、デューク……さ、ま……っ」

「追い詰められると苦しいけれど、こうして愛撫をやめられてしまうと、それはそれでつらいでしょう？　どうです？」

「あ、ん……っ」

彼の言う通り、ただ肌を吸い上げられるだけでは、中途半端に昂った身体が疼くばかりだ。愉悦に翻弄されているときは、一刻も早くやめてほしいと思ったのに。いざやめられると、もっとしてほしくてたまらなくなってしまう。

（う、うそ……。なんで、もっとしてほしい、だなんて）

ふと心に浮かんだ欲求に、イルミラはかぁっと首筋まで赤くなる。

一方のデュークはイルミラのそんな苦悩などお見通しとばかりに、彼女の首筋に舌を這わせながら、艶を帯びた低い声で囁いてきた。

「もっと素直におなりなさい。そもそも淫魔は本能に忠実な種族だ。恥ずかしがることはありません」

「で、でも……っ」

「とはいえ、恥じらう姿も多分に可愛らしくて、僕としては喜ばしいのですが」

「え、か、可愛い……？」

思いがけないことを言われ目を瞬かせるイルミラに、デュークはちゅっと口づけた。

「んぅ……っ」

「さぁ、腰を浮かせて。もっと気持ちいいことをしてあげますから」

「ふぁっ……、あ、いや……、ンンぅ……ッ！」

「なら、いいと言うまでキスし続けますね」

言葉通り、デュークは肉厚の舌をイルミラの口腔に差し入れ、縮こまる彼女の舌を絡め取り、丹念に擦りつけてくる。互いの粘膜がふれ合うぞくぞくした疼きが背筋を伝い降り、未だくすぶる下腹部をさらに熱くした。

「ん、くっ……ふぁ……」

くちゅくちゅと音を立てながら舌を擦りつけ合い、舌の根をくすぐられ、頬の内側を舐め上げられる。口蓋や歯列の裏をなぞられると自然と腰が浮き上がり、イルミラは無意識に身体をよじって身悶えた。

いつの間にかデュークの胸に抱きすくめられている。口づけの合間に臀部や太腿を撫でられ、イルミラは知らずびくっびくっとつま先を跳ね上げた。

硬くしこって感じやすくなった胸の頂が、彼の胸板に擦れるのがたまらない。息もできないほどの深い口づけに酔わされて、すっかり思考が鈍くなったイルミラは、気づけば彼の身体に自分の身体を擦りつけていた。

「はっ……んむ、ぅ……、んふっ……」

「そう。素敵ですよ。そのまま気持ちいいことに集中していなさい」

低い声でそう囁かれるのにすらぞくぞくして、息が上がってしまう。

うっすら目を開けると、眼鏡越しにこちらをじっと凝視するデュークの端整な顔が見えて、心臓がひときわ大きな音を立てて跳ね上がった。

「あ、あ、……デューク、さまぁ……っ」

「ああ、その声、最高にいいですよ。治療の成果が出てきていますね」

深くキスをされ、身体中を撫で回され、さらには舐め回され。治療というにはあまりに淫らすぎるそれに、イルミラは完全に溺れ始めていた。

（だって、気持ちいい……。キスも、すごく、感じちゃう……っ）

自分の奥底に眠る淫魔の本性が、ようやく目覚めのときを迎えたのだろうか。

だがそう思っても、いざドロワーズの紐がシュッと解かれる音が聞こえたときには、羞恥が一気に舞い戻って激しく動揺してしまった。

「あっ、あっ……！　取らないでぇ……ッ！」

しかし快楽に酔った身体では抵抗などできるはずもなく、薄い絹の下着はあっという間に床へ落とされてしまった。

「ああ……っ」

イルミラは思わず、羞恥とも絶望とも、あるいは期待ともつかないため息をつく。

とうとう自分は一糸纏わぬ姿を異性の前にさらしてしまった。……普通の淫魔であれば、少なくとも数年前にはそうなっていておかしくなかっただろう。そしてそれを誇りこそすれ、こんな風に心許なく思うことはないはずだ。

「み、見ないで、ください……！」

「無理な相談ですね」

デュークは淡々と言い切るが、そのまなざしはどこか優しかった。

「こんな美しい身体を前に、目を逸らすことなどできるわけがない」

「あっ……」

「綺麗ですよ、イルミラ。とても綺麗だ。この淡い茂みも、あなたらしくて愛らしい」

「んっ」

控えめな下肢の茂みを優しく撫でられ、イルミラはぴくんと華奢な肩を揺らす。弾みで乳房がふるりと揺れ、恥ずかしさに目元まで熱くなった。

デュークは無理に足を割り開こうとはせず、イルミラの腹部に顔を埋め再び臍に舌を差し入れたり、太腿をゆったりと撫で上げたりと、焦れったい刺激を送ってくる。

まるでイルミラが根負けして、自分から足を開くのを待っているようだ。悔しいことだが、実際に一番疼きのひどいそこにもふれてほしくて、足をもぞもぞさせてしまう。

「ふふっ、イルミラ、足がヒクヒクしていますよ」

「言わない、でぇ……っ」

わかっていることをわざわざ指摘してくるデュークをいっそ恨めしく思いつつも、指先でお臍をこちょこちょとくすぐられて「あぁあんっ」と声を上げてしまう。

汗ばんだ乳房をゆったりと揉みながら、デュークは悪魔のごとく甘い声で囁いてきた。

「ほら。どうして欲しいか言ってみなさい」

「そ、そんな……恥ずかしい……っ」

「繰り返しますが、これは治療なんです。あなたが淫魔らしく快楽に慣れ親しみ、自ら相手を求めるようにならなければ治療は成功とは言えません」

「そ、んな……、やっ、あぁあぁん……っ」

内腿を思わせぶりに撫でられて、イルミラはびくんと跳ね上がる。外気にさらされた恥ずかしい部分が期待にヒクついて、どうしようもなく泣きたくなった。

だが再び胸元に顔を伏せたデュークに、ぷっくり膨らんだ乳首をころころと舐め転がされ、まろやかな臀部を撫で回されると、恥ずかしいなどと言っていられなくなる。

今にも溢れ出しそうな愉悦に下腹部を波打たせながら、イルミラはついに観念した。

「デューク、さま……さわっ、て……！　お願い」

「どこを？　イルミラ」

「うっ……、し、下を……」

「下って？」

うぅ、とイルミラは小さくうめく。わかっているくせにわざわざ言わせようとするなんて。

恨めしさと悔しさに思わず顔をくしゃりと歪めるが、潤んだ瞳に上気した頬、艶やかに濡れた唇でそうしたところで、男の情欲を煽る結果にしかならない。

「さあ、イルミラ？」

むっちりとしたイルミラの太腿を指先でつぅとたどって、デュークが囁く。

イルミラは半ばやけくそになりながら、震える足を開き、自身の下生えをそっと押さえた。

「……っ、ここ、を……っ、ここを、さわって、ください……っ」

恥ずかしさのあまり、とうとう涙がこぼれてこめかみを伝う。

透明なそのしずくをデュークは唇で吸い上げて、彼女の豊かな髪を撫でた。

「よく言えました。ご褒美にたっぷりさわって、舐め回して、可愛がってあげましょう」

「ひっ……」

優しい声音で言われたというのに、なんだか空恐ろしく感じる。だが同時にドキドキもしてきて、イルミラは自分の感情を持て余してしまう。

そうこうするうち、デュークは彼女の太腿の裏に手をかけ、彼女の足を思い切り開脚させた。

「きゃあっ!?　あっ、あぁ……！」

診察台のときと同じような体勢を取らされ、イルミラはいやいやと激しく首を振る。

一方のデュークは落ちてきた眼鏡を指先でとんっと押し上げると、イルミラの秘所をのぞき込んでどこか愉しげに笑った。

「ああ、すっかり濡れていますね。てらてらと光って、とても綺麗だ」

「〜〜っ、言わないでぇぇ……！」

恥ずかしい場所をそんな風に評されて、イルミラは悲鳴を上げる。けれどデュークは至極真面目な顔である。

「大切なことですよ。女性が感じるとここを濡らすのは知っていますね？　あなたは今、気持ちよくなるための治療をしているのだから、ここが反応してくれなければ、逆に困ってしまうのです」

「ひうぅっ！」

そう言われながら、蜜をたっぷりたたえて濡れそぼった蜜口を指先で撫でられ、イルミラは腰を跳ね上げた。あまりの衝撃に見開いた瞳から涙が散る。

同時に蜜口からも、新たな蜜がとろりとこぼれ落ちた。

「あ、あ……っ、わたし、こんな……っ」

いくら自然なことと言われても、恥ずかしくてたまらない。無意識に逃げを打とうと、お尻が長椅子の座面の上を滑るが、すかさずデュークに押さえつけられてしまった。

「や、あ……っ」

「治療から逃げてはいけません。あなたはおとなしく悦楽を覚えればいい」

「うぅ……」

眼鏡の奥からじっと見つめられながら囁かれると、まるで魔法にかけられたみたいに身体の力が抜けていく。同時にお腹の奥底が不穏にうごめいて、さらなる熱を生み出した。

「そ、こ、撫でては……あぁあん……っ」

指先で蜜口をいじられると、くちゅくちゅという水音が耳について、どうしようもなく羞恥が煽られる。

ただ軽くくすぐられているだけなのに、最奥からとろりとした蜜がこぼれてくるのもいたたまれなかった。呼吸のたびに薄赤い陰唇が震え、その奥がうごめくのを感じる。

「ンンぅ……っ」

知らずイルミラは、もっと奥までふれて欲しいとばかりに細腰を宙に浮かして、彼の眼前に秘所を差し出していた。

「どうして欲しい、イルミラ？」

「はっ、あぁあ……、はんっ……、も、……さわって……」

「どんな風に？」

「あ、ひあぁぁ……ッ！」

意地悪く尋ねながら、デュークは彼女の肉ビラの周りをつぃと撫で上げ、それまでふれなかった一点を指先でかすめてきた。

蜜口がある割れ目の上部に、それは隠れていた。かすかにかかる茂みをよけ、包皮に包まれたそこにヌルヌルと蜜を擦りつけられると、信じられないほど感じてしまって、イルミラは震える唇から悲鳴を上げる。

「あああ……ッ、……そ、そこっ……、ひン、ぅう……ッ!!」

ぬちぬちと音を立てながら、デュークは膨らみ始めた花芯の周りをゆっくり撫でる。イルミラは豊かな胸を激しく波打たせて身悶えた。

「周りだけでそんな風になってしまうとは、直接さわったらどうなるか、楽しみですね」

「あ、う……っ、さ、さわらな、ぃで……っ」

反射的に拒絶するが、デュークがやめないことはわかっている。

それどころか、もっと強い刺激がほしいと思い始めている自分を感じた。

ねっとりと焦らされる愛撫は、続けられるとおかしくなってしまいそうで恐ろしい。

だったらいっそ、もっと強く攻め立てて理性を完全に打ち砕いてほしいと思った。

（だって、すごく気持ちいい……っ）

認めるのは悔しいが、彼の指や舌がふれるだけで、背筋がゾッとするほどの悦楽が生まれるのだ。

いったい自分がどうなってしまうのか恐ろしくもあるが、それ以上に、熱く火照ったこの身体を

どうにかして満たしてほしかった。

「ん、んぅ……は、ぁ……っ」

「だんだん素直になってきましたね。よい傾向です」

デュークが賢い患者を褒める医師の顔で囁く。だが眼鏡越しの銀の瞳にはそれだけでない強い光があり、イルミラはそれにうっとりと見とれた。

「ご褒美をあげましょうか」

艶めいた微笑みを浮かべながら、デュークがイルミラの秘所に顔を寄せる。

ぎょっとした次の瞬間、花芯を濡れた舌でぞろりと舐められ、声も出せないほどの衝撃に襲われた。

「ひぅっ……!?」

ビリッとするほどの愉悦がほとばしり、イルミラはびくんと腰を跳ね上げたまま硬直する。そのあいだも、彼は舌で繰り返し花芯を舐め、舌先でぐりぐりと押し潰してきた。

乳首や臍と比べものにならない感覚が背筋を駆け上がり、甲高い声を上げてしまう。

「ひっ……、あ、あんっ、ぅあっ……いやぁああ……ッ！」

思わず腰を引かせて逃げようとするが、デュークの腕がしっかりと腰を拘束してきて動けない。

足を大きく開かされたまま花芯をちゅるちゅると舐られ、すぐに目の前が真っ白になった。

「ひぅっ、んあっ……、あ、ああうッ！」

溜まりに溜まった愉悦が下腹部の奥から一気に溢れ、大波となって襲ってくる。

為す術もなくそれに呑み込まれたイルミラは、脳髄まで蕩かす快感に目を大きく見開き、背を弓なりにしならせて嬌声を上げた。
「ひあっ、んあっ！　……あっ、あああぁぁ――ッ!!」
身体中が指先までガクガク震える。腰が自然と浮き上がり、一拍遅れてどっと大量の汗が噴き出した。快感が頭を突き抜け息が止まる。
やがて糸が切れたように身体が弛緩して、イルミラはぐったりと四肢を長椅子に投げ出した。開きっぱなしの唇からはぁはぁと熱い吐息がこぼれ、心臓がバクバクと高鳴っている。
「い……いま、の……？」
「絶頂ですよ。あなたは無事に快楽の極致に達することができた。とりあえず、最初の治療はこれでクリアです」
イルミラの唇にちゅっとキスして、デュークがニコッと微笑む。
イルミラはつられたように微笑もうとしたが、デュークが「さて」と眼鏡を押し上げて真顔に戻ったので、大きな瞳をパチパチさせた。
「デュ、デュークさま……？」
「一度イったら、二度目はもっと楽にイけるようになるし、三度目はさらにいいはずです。少なくともあと五回くらいは達してもらいますからね」
「……え？」
「あくまで治療ですから、そのつもりで。あなたのイキ顔が素敵でもっと見たいからとか、ちょっ

と花芯を舐めたくらいで即達するなんて開発しがいがあるなぁ、ぞくぞくする～とか、そういう不純な動機ではありませんので、あしからず」
「……」
幸か不幸か、絶頂を得たばかりでぼんやりしたイルミラの頭には、デュークが一気にまくし立てた言葉の意味が正しく入ってこない。
けれど彼が治療の手を止めるどころか、緩める気もないのだということはひしひしと伝わって、知らず口元が引き攣った。
「デュ、デューク様……、わたし、もう疲れてしまって、これ以上は……っ」
「絶頂でちょっと気が緩んだだけですよ。大丈夫、淫魔は性を満たしたい気持ちが強いために、セックスのあいだは基本的に疲れ知らずという種族です。そのあたりもきちんと開発……じゃない、治療していくのでそのつもりで」
「いえ、あの、わたし本当にこれ以上は……あっ、……あああぁあんっ！　む、りぃ……ッ！」
言葉の途中で首筋を舐められた。次いで未だ硬く勃ち上がった乳首を咥えられ、ちゅっと吸い上げられたイルミラは、それだけでびくびく震えてしまう。
蜜を纏った指先で再び花芯をヌルヌルと擦られると、たちまち悦楽が再燃して、イルミラは逃げることもできずに嬌声を上げた。
「治療はまだ始まったばかりです。これから時間があるとき……具体的にはほかの患者がいないときですね。すべてあなたの治療にあてますので、そのつもりで」

そんな恐ろしい宣言のもと、赤く腫れた乳首を何度も吸い上げられ、真っ白な肌にさらなる吸い痕を残され、包皮を剥かれた花芯を長い時間舐めしゃぶられて――

「い、いやぁあん、だめっ……、――ひぁあああッ!!」

診療所に新たな患者が訪れなかったことも災いして、イルミラは結局日が暮れるまで、デュークの指や舌に翻弄され続けることとなったのだった。

第二話　吸血鬼さんも大変そうです……

イルミラが〈黒い森〉にある丸太作りの家にやってきて、五日が過ぎた。

大淫魔と名高いアネル・ラッドランプを母に持ちながら、男性恐怖症という厄介な性質を持って生まれたイルミラは、あと一年以内に処女を捨て一人前の淫魔にならなければ消滅する、という危機を迎えているのだ。

そのため彼女は藁にもすがる気持ちで、腕のいい人外専門の魔術医師を訪ねたのである。

未だ処女のため危機的状況に変わりはないが、魔術医師デュークの治療を受けつつ、なんとか事態を好転させようと努めているところだ。

だが、しかし……

（なんというか……、本当に、濃厚な五日間だったわ）

丸太小屋のそばにある物置に入ったイルミラは、デュークに施された『治療』の数々を思い出し、ついため息をついた。

なにせデュークは、イルミラの男性恐怖症を治すためにと、隙あらば淫らな行為を施してくるのである！

ついさっきもデュークに『治療』を施されたため、彼女の身体は熱く疼いていた。一歩踏み出すごとに足のあいだがむずむずしてしまって気が気でない。

「もうっ。いくら治療とはいえ、日の高いうちからあんな恥ずかしいことをしなくてもいいのに……」

中天近くなった太陽を見上げ、『あんな恥ずかしいこと』を思い出したイルミラは、途端に耳まで真っ赤になった。

基本的に昼間のデュークは忙しく、列をなす患者を捌くので精一杯だ。しかし今日のように、たまたま暇ができたときは、必ずイルミラをそばに呼んで淫らな治療をしてくる。

今日も恥ずかしがるイルミラを見えない魔力の糸で引き寄せ、あろうことか、診察用の寝台に仰向けに拘束してきたのだ。

おまけに足を蛙のように大きく開いた形で固定されて、イルミラは涙目になって懇願した。

『こ、こんな恥ずかしい格好は嫌です……！　離してくださいっ』

『これも治療の一環です。耐えてください。こうして淫らなポーズを取ることで羞恥が強まる、そうすると不思議なことに、興奮の度合いも増すのです。感じやすくなるための処置です』

きっぱり言い切るデュークは、患者を相手にしているときと同じ冷静な面持ちだ。
だからこそイルミラも強く拒否することができず、あっという間にドロワーズを取り去られてしまった。
『いやぁっ、見ないで……』
『もう何度も見ていますよ。今日もあなたのここは、淫魔とは思えぬほど清らかで美しい』
『ひっ』
おおよそ清らかでも美しくもないであろう秘所に指先を這わせながら言われて、イルミラはびくんっと下肢を引き攣らせた。
『さて、今日もこちらの性感を鍛えていきましょうか。感度がよくなればそれだけ、あなたも淫奔な淫魔の性に近づけるはずです』
『い、いや、いやぁあああん……っ』
めくるめく快楽が与えられる予感に、わずかな期待と多大な恐ろしさを覚え、拘束された身体を弱々しくよじったとき――
『ち――すっ！　魔術医師、いるかぁ!?　そこの石切場でちっと腕を切っちまったんだ！　治療してくれ……って、もっ、もおおお!?　淫魔か!?』
突如、診察室の扉がバーンと開いて、扉に収まりきれないほど巨大な影がぬっと姿を現した。
それが男性であることに気づいて、イルミラは思わず悲鳴を上げる。
一方で相手も、診察室に充満する甘ったるい匂いに当てられ、たちまち鼻息を荒くした。真っ黒

で大きな鼻から熱い息がふんっと飛び出す。まるで闘牛のようだと思って見てみれば、彼は正しく牛――ではなく、ミノタウロスだった。
『もおおお――っ！　これまた可愛い淫魔ちゃんじゃねぇか！　おい魔術医師、ひとりで楽しんでないでおれも交ぜ――ぐっほぁッ!!』
ゆるりと身を起こしたデュークが、突進してきたミノタウロスを拳一つで打ちのめす。
これでもかと魔力を籠めたらしい一撃は効果絶大で、見上げるほどの巨体が一瞬にして家の外まで吹っ飛んだ。その衝撃により診察室と玄関の扉枠がひび割れたが、デュークは涼しい顔で眼鏡の蔓を押し上げる。
『申し訳ありませんが、彼女は僕の女……いや失礼、僕の患者です。誰かと共有することはありませんのでそのつもりで。というか空気読めこのクソミノタウロス、死にたいのか』
最後の台詞は低く小さい声ゆえ、イルミラには聞こえなかったが、なにやらとても物騒な内容であることはその声音からわかった。
吹き飛ばされたミノタウロスが『も、もぉぉ～……』と情けなく泣きながらよろよろと戻ってきたので、イルミラは拘束を解かれると同時に急いで診察室の外の廊下に避難する。彼女が望もうと望むまいと、淫魔特有の匂いは周囲に影響を与えてしまう。なのでデュークがほかの患者（特に男性）を診察中は、奥にいて出てこないように言われていたのだ。
ここへきたときより幾分傷の増えたミノタウロスは、麻酔なしで傷口を縫合され、もおおおっ、とうめきながらのたうち回っている。

見るも恐ろしい光景だったが、幸か不幸かイルミラの視線はデュークに釘付けだ。彼は暴れるミノタウロスを魔力でさっさと縛りつけて、『はい、痛いですよー。痛くしますよー。邪魔された恨みは深いですよー』とニコニコ笑いながら縫合していく。

あれほどの巨体を易々と押さえつけ、さらには傷口を綺麗に縫合していくデュークの腕はたいしたものだ。

なんとも惚れ惚れしてしまう……。うっとり見入っていたイルミラは、いつの間にか全身から甘くも可憐な百合の香りを立ち上らせていたらしい。

おかげで治療中のミノタウロスに泣きわめかれてしまった。

『その匂い、ホントに毒だからやめてくれー！　傷が痛くて動きたくないのに、本能的にあそこが勃っちまう！　そんなところを見られたら医者に殺されるからやめて――！』

殺されるなんて物騒な。現にデュークは傷口を縫っているではないか、とイルミラは思うが、彼女から見えないだけで、デュークの目には明らかな殺意が浮かんでいたのであった。

……まぁ、それはともかく。

物置から薪を抱えて丸太小屋に戻ったイルミラは、奥の厨房へとまっすぐ進む。種火が小さくなってきた竈に薪を放り、魔術で風を送って火を大きくした。

今のイルミラは『入院患者』としてここに泊まり込んでいるのだが、身体は元気なので、空いた時間に細々とした家事を担っていた。

デュークは日々とても忙しく、掃除や炊事はおざなりなのだそうだ。その気になれば指の一振りでほこりを払えるし、湯を沸かしたりもできるが、もともと生活感溢れる暮らしをするタイプではないので、診察室以外は散らかっていようと構わないらしい。食事もパンや干し肉を近くの村で調達して、お腹がすいたときにつまむだけのようだ。

『医者の不養生』という言葉がピタリと当てはまるような生活に、彼の健康状態が心配になったイルミラは、自ら家事を引き受けることを申し出た。世話になっているわけだし、彼の手が患者にかかりきりのときは暇を持て余してしまうので、なにかしらしていないと落ち着かなかったのだ。

幸い家の仕事は嫌いではなく、イルミラは日々生き生きと働いている。汚れていた室内が掃除をすることで綺麗になるのは気持ちいいし、美味しい料理を食べることが好きだから、作ることも苦にならなかった。

ただ洗濯だけは、男物を洗うのが恥ずかしくて自分の衣服だけ洗っていたが。

そんなわけで、彼女は昼食の時間に向け、今日も張り切って調理にいそしむ。

竈が温まったところで、朝から寝かせていたパン生地を確認し、ほどよく膨らんでいるのに満足してからパンを焼く。その傍らで野菜を切ってサラダにして、鶏肉入りのスープもこしらえた。

そのあいだも、デュークのもとには立て続けに何人も患者の訪れがあったようだ。

イルミラは居間に昼食を並べ、患者がはけた頃に診察室へデュークを呼びに行く。

「ありがとう、イルミラ。昼食もとても美味しそうだ」

休みなしの診察で疲れた様子だったデュークは、食卓を見るなり嬉しげに目元を細めた。

普段あまり表情を変えない彼が、こんな風にちょっと微笑んでいるのを見ると、くすぐったくも

立ち読みサンプルはここまで